

つね。

うちのおじいさんというのはいわゆるこれこそ正統の高森城主の末えいなんだが、このじいさんが、明治時代にハワイに留学して、帰ってから英語の教師をやっていたんだ。それで英語の教師が二代続いたわけだよ。

親父が青山学院だったものだから、僕も青学の初等部に入れたんだよ。その時東京に出てきたわけ。だけど二年生の時に本土空襲が激しくなってきた、それで九州に疎開したんだ。

その時は人吉じゃなくて、宮崎の方だね。宮崎でミカン山をやっていたんだ。だけど人吉にも何時も行ってたけどね。

だからそれで川上さんと非常に親しくなったんだよ。それで「巨人の星」ができたんだよ。

彼が「哲のカーテン」とかなんかやって、マスコミをしめ出したろう。その時なんか、僕がキャンプに行っていてベンチに入ろうが、グラウンドに出ようが、何もいわないんだよ。それでめしなんか一緒に食ったりしてね。

梶原一騎

僕は「あしたのジョー」を書いた「高森朝雄」というのが本名なんだよ。

僕は親父からいつも言われていたんだよ。

父親と子供

今、マイホームパパで父親が子供の友だちになっているような時代に、「巨人の星」の星一徹と飛雄馬にしたって、わざとテールをぶっ飛ばすようなシーンがあるじゃない。だから父親というのはそんな友達じゃないんだ。あくまでも恐るべき、尊敬すべき存在だと。

マイホームという言葉が流行りだした時に逆にそのアンチテーゼでたのが新鮮だったんでしょね。読者ってのはおもしろいんだよ。星一徹はカッコいい親父だと。自分の親父はデレデレして、日曜日は車磨いたり植木の手入れやってる。それでこんな親父がお前らの家にいたらどうだと聞いたたら、家にいたら困るといふんだね。マンガ見てたらおもしろいとね。今のガキはそういうところがあるんだよ。

劇画

劇画を作る時は、大体は専属の絵描きは決めるからね。たまに新人をよそから引っばってくるけど、やはりいくら絵がうまくても、よく理解できる人間でないとはだめだね。

劇画ってのは、あくまでもその画が読者に訴えるわけなんだから、我々の書く要素は、ふきだしの中のセリフだけだ

「力があってもどこか抜けた所、甘さをもった人間になれ」とね。

宇治川の先陣争いで、佐々木高綱が梶原景季の後になって。それで負けそうなものだから「お前の馬の腹帯はゆるんでいるぞ」と言ったら梶原景季が本気になるって調べているうちに抜かれてしまったという話ね。

そういう彼は一番乗りできる力をもっているけど、そういう抜けたところのある男ね。人間ね。僕はこの話が非常に好きなんだよ。

それからやっぱり男というものはね、一騎というのは要するに「オンリーマン」に通ずるね。何か男というものは所詮孤独なものだということだね。

「梶原一騎」というのは今思うと恥ずかしいペンネームだと思うけど、もう売れちゃったからね。今だったら少し文学的なペンネームをつけるよ。

不完全燃焼はきらい

やっぱり男というものは、自分のもっている全てを燃やし尽さなくてはね。僕は不完全燃焼が一番きらいなんだよ。だけど今は不完全燃焼の青春が多いでしょう。だから若い人たちに「巨人の星」とか「あしたのジョー」なんてのが受けるのではないの。「あしたのジョー」なんか映画にもして、大ヒットしたしね。今の世の中の風潮が暴走族だとか、男と女

がくっつけばすぐラブホテルという風潮でしょう。そういうような風潮に便乗して、そういうのをあおったって、ちっともおもしろくないんだよ。「愛と誠」

って作品があるけど四年間のドラマの中で、後から二ページ目にはじめてキッスするようだね。僕はわざとあいつの流に逆行しなきゃ受けないよ。その時代に対してアンチテーゼをたてなきゃだめなんだね。読者に媚びたらだめだよ。

僕の場合は、編集者がこういうのを書いてくださいといってきたも書かないんだよ。自分の書きたいものがないとね。

そういうやり方だったから、初めの頃は貧乏ばかりさ。だけど貧乏には慣れていしね。うちの親父なんか「世渡り下手の守」なんてあだ名つけられちゃってね。一応は城主の末えいだからさ。だから僕は子供の頃から赤貧洗うが如く生活してたからね。貧乏なんて全然こわくないわけよ。

熊本県人

熊本県人ってのは、ちょっとシンがあって偏屈なんだよ。うちの親父もそうだったし、じいさんもそうだった。僕はひよんなことで時代にあたり、うまくぶつかって、いささかの嬌名を博したけど

ね。僕みたいなのは高森家の歴史でもめずらしいことだよ。

親父のこと

僕の親父は山梨県の中学教師をやめてから「中央公論」にはいつて、それから「改造」に転じたんだよ。戦後は「新生社」というところにはいつてね、「新生女性」、東京」なんてね、薄いザラザラの紙の本だけと飛ぶように売れたんだよ。ジャーナリストとしてもうまくやれたんだから、頭のいい人だったんだよ。中学教師から中央公論にはいつて編集長までやったんだから。

それからウチの親父というのは典型的な絵にかいたような肥後モッコスだったからね。星一徹なんか完全にうちの親父がモデルなんだよ。親父の友だちがいうんだよ。「世の中に迎合しないところなんか、お父さんそっくりだ」と。今度平凡社の「太陽」という雑誌でうちの親父の特集をやるけど。

父親と息子というのはある意味ではライバルなんだよ。友達なんかじゃないんだよ。小さい時は恐ろしい存在だし、長じて親父を乗り越えられなかったらどうしようもないからね。しかし僕は常に親父を乗り越えられないような感じだったね。僕が乗り越えないうちに死んじゃったけど。

「雨の朝パリに死す」じゃないけどさ。例えばステーキハウスのロッキー青木ね。あいつ全ク氣質の異うアメリカ人を相手にして一旗あげていく日本人の最たるものを本当の大ロマンで書いてみたと思うね。

もうスポーツ根性ものというのは、野球は「巨人の星」、ボクシングは「あしたのジョー」、柔道は「柔道一直線」、空手は「空手バカ一代」で書き尽しちゃったからスポ根はもう廃業しないとだめなんだよ。

男は自分のボディでもってロマンをかいていかななくてはいかんと思うね。おもしろくもおかしくもない短い人生だからね。

僕は子供の頃阿蘇山を見てすごいなあと思ったんだよ。今でも富士山なんかよけりずうつといふと思ってるけど。ところがアメリカに行った時、飛行機がグラウンドキャニオンの上を飛ぶんだよ、あんなの見たら阿蘇山なんて箱庭みたいなもので、上には上があるしな。本当にすごいんだよ。

郷里でがんばれ

宮崎は新婚のメッカードになってるし、長崎はエキゾチックなムードでもって観光客が行くけど、なんで熊本には観光客が行かないんだろうな。

この前講演で熊本に行った時、大衆酒場で熊本の大衆酒場ってのはうまいんだよ。そこで馬刺かなんかワイワイやっていると、若者たちが「梶原先生じゃないですか。いつ来られたんですか」なんて寄ってきて、一緒にワイワイやるんだよ。僕が熊本出身ということで、すごく親愛感を持ってもらえるね。

だから僕が若い人たちにいいたいのは、東京なんかにあこがれないで、なるべく郷里でがんばった方がいいんだよ。熊本は旧制五高時代から文化面でも優れているし、城下町としても立派だし、水前寺公園もある、天草もあるんだよ。だからそのためにも熊本県は観光とか産業を隆盛にしてね。東京なんかへ出てきたってろくなことはないんだからさ。

とにかく若い人が郷里を離れないで、でまた離れないでちゃんとした文化的な生活ができるよう県も考えなくてはいかんなしさ、日本の国土は狭いんだよ。だから企業の進出なんかで環境破壊とか伝統的な風物とかがなくなってしまうのは、ある程度はしようがないことなんだよ。

僕が熊本県出身でなくて、他の県であっても同じことをいうね。

だから今の若者たちは、なるべく郷里でがんばって、郷里の文化を担ってほしいね。